慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「四十エキュの人」
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1920
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.14, No.2 (1920. 2) ,p.289(147)- 297(155)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19200200-0147

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

主義制度の下における國家に代はるべきもので各部の生産者に生産命令を發する機關である。然し乍ら問題は何か生産さるべきかと云ふことは實際之を生産する勞働者に關することであるか、または社會に關することであるかと云ふことである。この問題は生産者が何を生産するときにおいても生産者として關係する事項ではない。故に其擴張した機能を有する勞働取引所または勞働組合會議は事實上變形した國家または自治體に過ぎないものであつて、そは決して、眞の生産者の團體ではなくて、不完全な消費者の團體に過ぎないものである（World of Labour. p. 353）オレーヂも同じくサンディカリズムを批評して云ふ。「國家資本主義に對する反動としてサンディカリズムは國家を否定する所まで行つた。然しながら實際的の思想に於いては國家もサンディカも共に認められて居る。この事が實質上、近時のフランスのサンディカリズムをして英國のナショナル・ギルヅの主義と一致せしめたのである。」と（Orage :— op. cit. p. 153）

以上私は、集産主義及びサンディカリズムの産業管理問題に對する態度とギルト社會主義のこれに對する批評の一般とを窺つた。集産主義における國家萬能主義もサンディカリズムにおける國家の否定も共にギルト社會主義の是認する所でなかつた。而して現今の社會主義が集産主義を意味するものとしならば「集産主義は益々實業的計劃となり、愈々其感激すべき理想を失ひつゝあつて、社會主義は煩悶して居るのである。もしも、社會主義がサンディカリズムにおけるよきものを採り、之を集産主義におけるよきものと調和するならば、そは生氣ある主義に復活し、益々活氣あるものとなることが出來る。」（World of Labour. p. 369）コールは斯〜の如く社會主義の淨化をサンディカリズムと集産主義との長所に求めて、其ギルド社會主義を主張するに至つたものである。

斯の樣に産業管理問題に對する態度は集産主義に於ては消費者專制であり、サンディカリズムに於ては生産者專制である。ギルド社會主義はサンディカリズムの主張に同情を持ちながら尙ほ之に對して全部的の肯定を與へないのである。ギルド社會主義は前にも述べた樣に産業管理における生産者の重要を高唱する、けれども彼等はまた消費者の存在を無視することが出來なかつたのである。即ちコールの言の如くサンディカリズムと集産主義におけるよきものを取つて之を綜合せんと試みたのである。之を一面から言へばサンディカリズムと集産主義との妥協である。だからベルトランド・ラッセルはギルド社會主義は英國人の妥協を好む精神の發露であると評してゐる。（B. Russell :— Proposed Roads to Freedom. p. 115）然らばサンディカリズムの國家の否定を非とし、集産主義における國家萬能を非とするギルド社會主義に於ける國家とは何であるか、其機能如何。（以下次號）

「四十エキュの人」

高橋誠一郎

一

佛蘭西が最初の經濟學派たる Physiocrates を産したるは、ユーモリストを多く出せるを以て顯著なる時代なりしに拘らず、彼れ等の徒は孰れも皆な機智を缺き、華麗を失し、端嚴莊重にして、又た屢々陰鬱鈍重なる筆致を以て、乾燥無味なる問題を論じたり。而して宛も彼れ等のみ獨り永劫不變なる眞理の受託者たるが如く、

其の論理の堅固を主張する尊大獨斷なる態度は亦た屢々時代の反感を惹起せざるを得ざりき。(Mlle de Lespinasse に與へたる Turgot の手簡並びに Abbé Anné Morellet に寄せたる David Hume の尺牘は這般の消息を傳へたり)。斯くて彼れ等は軈て Voltaire が辛辣なる譏刺の好餌たるに至りぬ。

Françoise Marie Arouet de Voltaire（一千六百九十四年十一月二十四日生—一千七百七十八年三月三十日死）が匿名の諷刺小說、L'homme aux quarante écus, 1767. は主として Mercier de la Rivière が L'ordre naturel et essentiel des sociétés politiques, 1767. を駁擊するが爲めに著されたるものなり。彼れは屢々 Quesnay が火曜日の集會に出席せる時の駐佛露國大使 Dimitri Galitzin 公が彼れに寄せたる書中に於て、此の書を以て Montesquieu の De l'esprit des lois, 1748-9 よりも遙かに以上の名著として推稱せる過大なる讃辭に刺戟せられ、而して著者の下せる斷案のみならず、亦た其の驕傲にして學派的偏狹心强大なるに憤懣し、其の編著の吾人に物語れるが如く、一時の氣分に驅られて其の筆を執り、而して、恐らくは、彼れが未だ通讀したることさへなき此の書と其の著者の屬したる謂ゆる Économistes 學派全體に對して機智横溢の攻擊を行ふに至らしめたり。「四十エキュの人」は浮躁淺薄の非難を免れずと雖も、眞摯と熱誠とを缺ける一團の人士を笑殺せしむるの效果充分なる可き佛國民的諧謔と快活とに富める痛快無比なる諷刺なり。此の書は統計學者、カルメル派の僧侶、理論的財政家、及び其の餘の人々を愚弄せりと雖も、而も先づ其の矢面に立てるは Physiocrates なりしなり。

L'Homme aux quarante écus は全篇悉く謂ゆる「四十エキュの人」の自叙體を以て編まれたり。曰く、常に現在の時世を憐み、過去を讃美しつゝある (Toujours plaint le présent & vante le passé) 一老人、余に謂へるは「友よ、現時の佛蘭西は之れを Henri 四世の時代に比するに、其の富裕の程度遙かに劣れり。即ち、土地の耕作は彼れの治下に於けるが如く十分なるを得ず。土地耕作の用に使傭し可き雇人は不足し、而して日稼人は其の勞働の價格を引上げたるが爲めに、幾多の地主は其の祖先傳來の地產を空しく休耕地たらしむるが故なり。而して斯くの如く雇人の稀少を來したる所以は、苟も勤勉の精神を有する者は悉く縫箔師、彫鑲師、時計師、絹織匠、辯護士、若しくは宣敎師の職に從事すると、Nantes 勅令の廢止が王國内よりして多數の人民を退去せしめたると、有らゆる種類の尼僧及び乞食が著しく增加したると、一般人民が出來得る限り勞苦多き耕作の勞働を回避するとに在るなり。」(ibid. 1768. pp. 1-2.)

「國家窮乏の他の原因は吾人の新たなる欲望に存す。吾人は一貨物に對し、我が隣人に四百萬を支拂ひ、而して他に對して五六百萬を支拂ふなり。例へば吾人が嗅覺をして滿悅せしむるが爲めに亞米利加より齎されたる惡臭を發する粉末の如き是れなり。吾人の使用する珈琲、茶、チョコレート、洋紅、藍、香料は每年六千萬以上の費用を吾人に課す。總べて是れ等のものは Henri 四世の治世に在りては未だ吾人に知悉せられざりしものにして、獨り香料は當時に於ても存したりと雖も、而も其の消費は今日の如く大なることなかりしなり。吾人は當時に比し一百倍の蠟燭を燃燒し、而して吾人は自國の蜂房を等閑視するが故に、其の蜜蠟の過半は其の供給を

外國に仰ぐなり。吾人は王妃を初め、Henri 四世の宮中に於ける、有らゆる女官の帶用せる所に百倍せるダイアモンドが巴里其の他の大都會に於ける我が市井の婦人に依りて其の耳に、其の首の周圍に、而して其の手の上に使用せらるるを見るなり、殆んど有ゆる贅澤物は必然現金を以て支拂はれざる可らず。(pp. 2-3.)

「特に吾人が Hotel-de-Ville（市役所）に對する年收一千五百萬以上を外國人に支拂ふこと、並びに Henri 四世は其の登極に際し、此の假想の Hotel に對し總計二百萬の債務を有するを見、賢明にも國家をして這般の負擔より安易ならしむるが爲に其の一部を償却せることを注意せよ。我が內亂は Don Phelippo el Discreto が佛國を買收せん事を企圖したる際に、墨其西哥の金銀をして王國內に流入せしめたるの原因たりしこと並びに爾後、我が外戰が吾人をして其の貨幣の一半を喪失せしめたるとを熟思せよ。是れ等は幾分吾人が窮乏—吾人が掩飾せられたる天井の下に、若しくは時好商人の詭計に依りて隱匿しつゝある窮乏の原因なり。nous sommes pauvres avec goût. 收稅官、請負人（entrepreneurs）及び商人等は頗る富有なる可く、其の子孫、其の女婿等も亦た頗る富有なりと雖も一般國民は不幸にして然らざるなり」。(p. 3.)

III

次章は「四十エキュの人の災禍（Desastre de L'-Homme aux quarante écus.）」と題せり。一エキュは三リヴルなるを以て、四十エキュは即ち百二十リヴルに相當し、Mercier de la Rivière が自然の支配する社會に於ては各市民の生存に取りて充分なる高と思惟したるものなり。

「余は余が其の上に課せられたる租稅の支拂に當つ可きものなしとせば、一ヶ年、四十エキュを余に與ふ可き地產を有することを江湖に吹聽するを悅ぶものなり。

他に能事なきが故に、自己の爐邊よりして國家を支配する、或る人々よりして數多の布告は發せられたり。是れ等布告の前文は『立法及び行政の權力は神權に據つて、本來、余が土地の共同所有者なり（législatrice & exécutrice est née de droit divin co-propriétaire de ma terre.）』而して、少くとも余は余の領有せるものゝ一半を之れに負ふものなる事を記せり。此の立法及び行政權の胃囊の廣大なるは余として熱心に我が身を祝福せしむるなり。若し此の『社會の本然の秩序』（l'ordre essentiel des sociétés）を統轄する權力にして、余が僅小なる地產の全部を取得す可しとせば如何。そは從前に比して更らに一層神聖なる可し。

「總監閣下は余が總額十二リブルを支拂ふに過ぎざるの習ひなること、そは余に取りて頗る苛重なる負擔なること、而して若し神が余をして其の困窮に堪えしむるの援を爲せる柳技細工の籃を製作するの才能を余に與へざりしならんには、余は之れに壓せられて已に倒れ伏せるなる可きを知れり。然らば、余は如何にして不意に國王に對し、二十エキュを與ふるを得可きか。

新任の大臣等は又た其の前文に於て、有らゆる物は土地より發する（雨其の者さへも）が故に土地のみ惟り課稅せらる可きこと、隨つて又た土地の果實を除きては、當さに租稅を負擔す可き物なきを說けり。

最近の戰爭中、彼れ等が執行吏の一人余が家に來りて、彼れ等の行ひつゝある戰爭を持續するが爲めに、余の負擔額として、小麥三桝並びに大豆一袋總體の價二十エキュを余より要求せり—單に、此の戰爭に於ては、我が國は何物を

も得る所なくして、失ふ所多しとの噂を耳にせるに過ぎざるが故に、余は其の理由を全然知悉せず。余は其の當時、小麥も大豆も、亦た貨幣をも有せざりしが故に、立法及び行政の權力は余を獄屋に拉し去れり、而して戰爭は其の力の限り續行せられたり。

余が骨と皮とのみにて牢獄より放免せられたる時、余が出會ひたる者は、實に六頭立ての馬車を驅る肥大にして肉色鮮かなる人なりき。彼れは六人の從僕を有し、其の各々に對し、余が所得の倍額以上を勞銀として支給せり。一見宛も彼れ自身の如く血色良き、其の家令は彼れより二千フランの俸給を受け、而して更らに毎年二萬を彼れより奪ふなり。彼れの夫人は六ヶ月内に四萬エキュを彼れに費さしむるなり。余は曩きに彼れが余自身よりも生活困難なりし時代に於いて之れを知れり。彼れは余を慰めんとして、彼れが一ヶ年四十萬リヴルを享有する旨を自白せり。余は曰へり。「然らば御身は、此の所得中より、吾人が行ひつゝある、かの有利なる戰爭を持續するが爲めに、國家に對して、二十萬を支拂ふものと想像す、即ち、恰も一ヶ年一百二十リヴルを有するに過ぎざる余は、其の半ばを支拂はざるを得ざるが故なり」と。

彼れは曰へり。「余？余が國家の所要に對して出金するとや。我が友よ、御身は正さに諧謔を弄しつゝあるなり。余は一人の伯父より、彼れが Cadix 及 Surate に於て取得したる其の八百萬の財産を相續せり、余は一吋の土地をも有せず、余が財産は總べて政府證券及び手形より成れり。余は國家に對して何等の債務なし。其の資産の一半を交付す可きものは土地の所有者たる御身等のことなり。若し大藏大臣にして、我が國家を援助するが爲めに余より或る物を要求せりとせば、彼れは頭腦混亂せる痴呆なる可きを知らずや。何となれば、有らゆる物は土地の所産なるが故なり。貨幣及手形は單に交易の徵證に過ぎず、余は紙牌に百桝の小麥、百疋の牛、千疋の羊及び二百袋の燕麥を賭くる代りに、是れ等の嫌惡す可き貨物を代表する黃金の堆積を賭くるなり。御身は、若し是れ等の貨物に對し有らゆる他の租稅に代る可き單一稅（impôt unique）を課せる後、政府にして猶ほ余より貨幣を要求せんとせば、そは二重の負擔を負はしめ、同一物を再度徵するものなることを知らずや。余が伯父は Cadix に於て、御身が小麥の二百萬、並びに御身の羊毛より製したる織物の二百萬の高を賣却し、是れ等の兩取引に際し、十割以上を利せり。御身は明かに這般の利潤が既に課稅せられたる土地より生じたるものなるを知る可し。余の伯父が汝より十スーを以て、購入したる物を彼れは十フラン以上を以て更らに墨其古に於て販賣せり、而して、一切の費用を支拂ひ、正味八百萬を齎して其の本國に歸れり。

御身は固より、彼れが御身に支拂へる十スー以上に、再び彼れより數オボールを要求するは甚しき不正事なることを認むるなる可し。若し其の伯父にして各々墨其古、Buenos Aires, Lima, Surate 又は Pondicheri に於て、八百萬を利得せる、余の如き二十人の甥が、國家の緊急なる必要に際し、各々僅かに二十萬フランを之れに貸出す可きものとせば、そは四百萬を生ずるなる可し。如何にすさまじからずや。然らば我が友よ、平穩に正味四十エキュの純收入を享有する御身は支拂ふ可し、克く御身の國に奉仕す可し、而して折々は余が定服の從僕と共に食事するが爲めに來る可し。」

此の稱讃の辭は余をして稍や暫く思案に沈ま

しめたり、而もそは多く余を慰藉する所あらざりしなり。(pp. 5-9.)。

四

次で彼れは當時の統計學者を嘲れる「幾何學者との會話（Entretien avec un geometre)」以下四十エキューの人と種々なる社會階級との間の對話を掲げたり。Condorcet は其の刊行せる Voltaire の著書に於て這般の諧謔的攻擊に對してフィジオクラートを擁護せり。Voltaire は其の常例の不眞面目を以て Mercier が眞の意味を誤つて表明し、甚しく過大して說くを免れざりしなり。尙ほ Anselme-Polycarpe Batbie が L'homme aux quarante écus et les Physiocrates. を參照せらる可し。

彼れは其の後、一千七百七十二年、其の諷詩 Les Cabales に附せる備考に於てフィジオクラート學派に對して頗る酷烈なる毒言を發し、彼れ等を呼ぶに「自ら破產しつゝ、商業に由りて富有と爲るの術を敎へ、自己の小室を出づることなくして、世界を周遊し、而して曾つて一つの犁を持ちたることなくして、我れ等の穀倉に穀物を充すの人々」なりと倣せり。然れども、彼れは軈て同學派の人々及び其の後年の著書を知ること更らに深きに至ると共に、彼れ等を稱揚すること頗る大なるに至れり。彼れが其の晩年に至り、人として、哲學者として、又た大臣として Turgot を讃美せることは殆んど無限なりき。彼れが Turgot の失脚に際して、彼れに寄せたる其の詩 L'Épître à un Homme、同じく彼れに宛てたる其の書簡及び報告、及び特に一千七百七十五年の Diatribe à l'auteur des Éphémérides (Abbé Baudeau) を參照せらる可し。此の最後のものに於て、彼れは Turgot を叙して、見解の廣さは Colbert に等しく、知見に富めるは Sully に越え、而して其の胸裏に眞個の哲學を有すること兩者の孰れよりも勝れりと言へり。彼れは一千七百七十四年 Du Pont に書して曰く J'ose féliciter la France que M. Turgot soit ministre et qu'il ait un homme tel que vous près de lui と。彼れは又た其の Fragments sur l'Histoire. に於て曰く、「余は Éphémérides du Citoyen を讀めり、洵に其の題號に價する述作なり。此の雜誌及び百科全書中の農業に關する好個の項目は、余の意見に據れば全國民の敎養及び幸福に取りて十分なるものあり。（中略）、余が農業に關し、何物をも書する所なかりしは、余が決して Éphémérides 以上のものを草することを能はざる可きが故なりと。

而も、老 Mirabeau は衷心よりして彼れを憎惡せり。彼れは曾つて戰慄す可き言辭を以て Voltaire を非難して曰く、彼れは人類の上に天刑病者をして其の息を吹きかけしむるものなり (Il a soufflé la lépre sur le genre humain) と (L. de Loménie, Les Mirabeau, ii. p. 266.)。而して又た彼れは Voltaire が La Pucelle d' Orléans. を繙けるに際し、激怒を發して其の書を火中に投じたりと云ふ。

（附記）以上は L'Homme aux quarante écus. (1768). The Man of Forty Crowns (The Works of Voltaire, 2), Henry Higgs, The Physiocrats. 1897. 及び其他に據りて草せるものなり。